

連珠つておもしろい

第36回

九段 河村典彦



追悼記事を書くのはいつもつらいが、早川さんの追悼記事をこんなに早く書くことになるとは思わなかつた。早川さんとの付き合いは思えば長い。私が最初に

解説をしたりしたが、早川さんは夕刊フジへの原稿書き（中村名人に挑戦、東西対抗戦など）、京都新聞への詰連珠の投稿など新聞社とのつながりも強かった。私は講評を手伝つたり、京都新聞の詰連珠に研究室の仲間の名前で応募したりして協力していた。

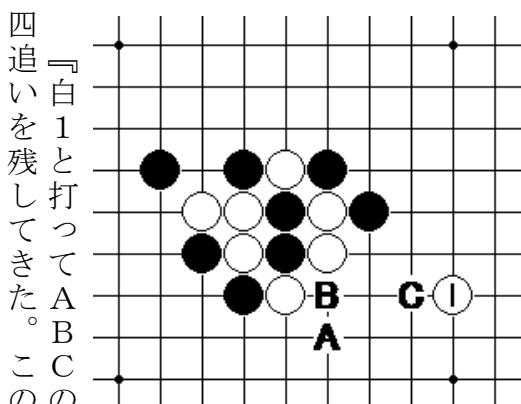
私が京都連珠会に入った59年8月にはスウェーデンの（爆笑）報告会があり、家族で海外普及に努めていた。ただ、それを快く思わない人もおり、「なぜ国内ではなくスウェーデン？」「スウェーデン募金を毎回払うのがちよつと：」という声を聞いたことがあつた。私としては外からやつてきたのでそれほど感じてはいなかつたが、古くから京都連珠会に参加している方は早川さんのやることにこれまで全面的に支援していたが海外普及には全面的には支できなかつたのだろうと

思う。当時は既に西山さんとの確執が知られていたが敵も味方も多い人だった。その根本要因として、早川さんが個人事業者（社長）だつたことにあると思つて、思つたことがほんとできる。ただ、それは会社といふ組織だからであり、逆に趣味の会とか自治会などが一番まとまらない。皆が好きかつて言う、好き勝手するからである。ただ、早川さんはそういうハンドをものとせず、普及活動に邁進していた。その情熱のおかげで88年にRIFができ、89年に第1回世界戦が京都で行われた。この頃から10年ぐらいたが早川さんのピークだつたと思われる。よく飲み会で言つていたのは「名人と理事長を東京から京都に持つてくる」だつた（正確には思えていないが）。京都のメンバーにとつては打ち中村茂だつたし、誰もが

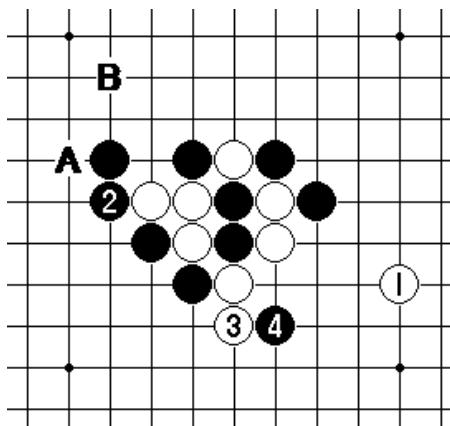
連珠社に不満を持っていたことは確かだろう。後に理事長となつた早川さんは連珠社改革を行い、全国を行脚された。

2000年代に入り、早川さんのモチベーションが目に見えて落ちてきた。その頃私も彦根に転勤で京都に行けなくなり、少し心配していた。そして2001年の京都での世界戦、奥様がなかなか動かない早川さんを心配してない。さすがにぎりぎりになつて動き始めたが、そこで燃え尽きてしまつた。ちようどその頃理事間で揉め事があり、連珠社理事長も辞任されてしまつた。

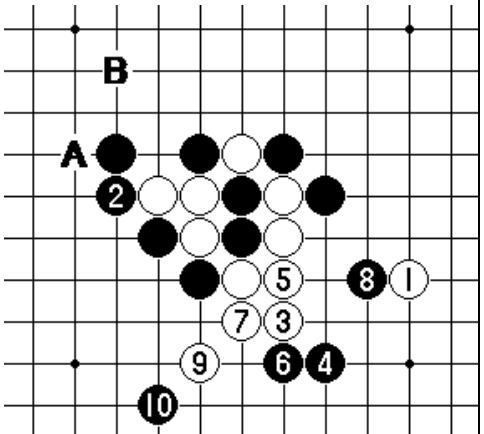
その後しばらく隠居されていたが、私が理事長になつて再び連絡を取るようになつた。冒頭の写真は2017年のものである。西田さんに仲介してもらい、再び会うこととなつた。ただ、早川さんは随分復活することにためらつており、寄附が



『白の四追いを黒2とノル
のが急戦法である。譜の自
3はやむを得ない。だが、
それなら黒4と白の四先を
タタいて十分の姿である。
このあとAやBが楽しみで
ある。』
ということは黒有利?
〈解説2〉



みな局面である。』この後もう1回解説があり、従来の連珠本とは内容が全く違うのに驚いた。連珠世界の記事並みに解説がしてある。これは確かに難しい。でも連珠の魅力を一生懸命伝えようとしている。情熱の塊の人であった。



あつても必ず匿名で、とお
願いされていました。今後も連
珠社を見守つてもらいたい
と願つていたが、まさかこ
んな形でお別れになるとは
思わなかつた。

さて、早川さんはこれま
でいくつか本を書いている
が、『これが連珠だ』は傑作
だらう。ただ、「これは難し
すぎる」との評価が多かつ
た。私も実際に手にしたの
はかなり後だつたが、確か
に難しい。その内容を少し
紹介しよう。

あと黒にどのような展開が考えられるだろうか?』とあり、この問題に限らず考えさせる系の問題が多い。この問題の回答としては次の図が示されていた。

—それならばと白35
とノビてから7と防いでおくのが当然考えられる。これには黒8が急所の一撃だ
白9なら黒10とおとなしくついていくのがミソ。やはり黒AとBを睨んで楽し